くらし変化球

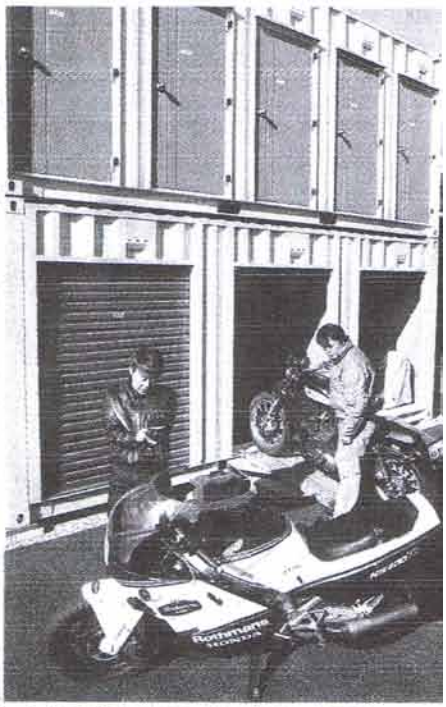
守りのテク 3

宝物保管 プロ任せ

埼玉県越谷市に住む会社員、境田大樹さん(40)は休日、自宅マンションから歩いて十分ほどのコンテナ型倉庫に向かう。

オレンジや青で彩られた三畳ほどの倉庫から取り出すのは米国製の大型バイク、ハーレー・ダビッドソン。排気量一二〇〇ccと一四五〇ccの二台を使い分ける。昨年買ったばかりの二台が盗まれないように、防犯カメラを備えたトランクルームに預けているのだ。

五年ほど前、境田さんは衝撃的な場面に出くわした。当時乗っていた中型バイクが駐車場から運び去られようとするところを帰宅時に目撃。〝犯人〟が気配を察して未遂に終わったが、すでに二台を盗まれていた境田さんは「もう維持できない」と思い、盗難を逃れたバイクも手放した。昨年になって再びまたがる決心をしたのは、バイク保管を売り物にする倉庫を見つけたからだ。



休日には倉庫からバイクを取り出す（埼玉県春日部市）

運営するアペックスホームズ(埼玉県春日部市)では、利用者のうちバイクを預ける人の比率が「五年前の五%から一〇%前後に伸びた」(増田浩一代表取締役)。盗難防犯システムを整えるより安上がり」と満足げだ。

盗難が後を絶たないためだ。二台を預ける山田勝哉さん(39)は「倉庫代は月一万六千円程度。自前で犯罪や災害から守るため、自分の宝物を預けてしまおうと考える人は多い。寺田倉庫(東京・品川)ではワインを預ける愛好家が年一五%前後の割合で増えている。

以前の利用者は保管庫のある首都圏に住む人が大半だった。最近では沖縄県や北海道からも箱単位でワインを送ってきて、適温での保管を求める。地震や停電があっても専門倉庫ならば被害が少ないとの期待からだ。

東京都中央区で貸金庫を営むセフティボックスには昨秋、「空きはないのか」という問い合わせが殺到した。店長の男性は「暴落した株や金融商品を売り、貴金属などを買った個人が預け先を探した」と推測する。

千葉銀行も同じ時期、三百六十五日体制で使える貸金庫を一部支店で始めた。自宅の登記簿や生命保険の証書を預ける七十四歳の女性(千葉市美浜区)は「家の金庫はあてにならない」と話す。夫に先立たれ、未婚の息子二人と一緒に暮らすが、「平日の昼は一人なので不安」という。

保管のプロを頼る人が多いのは、まさに世相の裏返しなのだ。